論　文

若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究(6)

—親との関係経験が恋愛観におよぼす影響—

諸　井　克　英

現代社会学部・社会システム学科

諸井（2002）は，若者の「恋愛」概念の様態とその基底にある心理学的メカニズムの解明の重要性を指摘し，対異性-有能性や対異性-不安と関連づけながら恋愛観の基本的構造を明らかにしようとした。その際にLee（1977）によって提起された恋愛スタイルの概念の検討が中心とされた。

Lee（1977）は，恋愛小説における恋愛の扱われ方や，青年を対象とする面接に基づき，次の6つの恋愛スタイルを提起した。①マニア（独占欲が強い。嫉妬，強迫的な執着，悲哀などの激しい感情を伴う），②エロス（恋愛を至上のものと考え，ロマンティックな考えや行動をとる。相手の外見を重視し，一目惚れを起こす），③アガペ（相手の利益だけを考え，相手のための自己犠牲を厭わない），④ストルゲ（穏やかな，友情的な恋愛。長期にわたり愛を育む），⑤プラグマ（恋愛を地位上昇の手段として考える。社会的地位の釣り合いなどの基準をたてて，相手を選択する），⑥ルダス（恋愛をゲームとして捉え，楽しむことを重要と考える。相手に執着はなく，距離をとる。複数の相手と恋愛できる）。

Hendrick & Hendrick（1986）は，これらの恋愛スタイルを計量的に測定する尺度を開発し，Leeの考えを実証的に支持した。わが国でも松井ら（1990）がHendrick & Hendrickの尺度に独自に項目を追加して新たな尺度を作成し，Leeが仮定した6スタイルに該当する主成分を抽出した。

しかしながら，諸井（2002）の研究では，男女ともにエロスを除く5つの恋愛スタイルのみが抽出された。Leeが提起した基本要素の1つであるエロス成分が得られなかったのである。先行研究（Hendrick & Hendrick, 1986; 松井ら, 1990）では被験者に「特定の親しい異性」との関係を想起させて回答させている。諸井の結果は，Leeが仮定したエロスの側面が恋愛に対する一般的態度としては存在しないことを示すと解釈できる。この原因に関して「社会的望ましさ」の影響などの観点から議論された。

以上のことを踏まえ，本研究では，測定項目の追加を行い，恋愛自体に対する意識や態度の基本要素としてエロスが存在するかどうかを再吟味する。これを本研究の第1の目的とする。

Bowlby（1969）は，母子関係に関する種々の知見を「愛着」という概念の下で統合し，「母性的人物の喪失」が「精神医学的に興味深い諸反応を引き起こす」こと，つまり，幼少期の「母性的人物との分離経験」が「将来の人格障害」につながると結論づけた。「愛着人物」との一定の相互作用を通して人の内部に形成される心的表象を意味する「内的ワーキング・モデル」の形成の重要性が主張された。Hazan & Shaver（1987）は，「内的ワーキング・モデル」の考えに基づき，成人における3つの愛着スタイル（安定型，回避型，不安/アンビヴァレント型）を提起した。彼らは，これによって愛着の概念を恋愛関係に適用しようとした。この試みを契機として，愛着と恋愛を関連づける多くの研究が生み出された。Bartholomew（1990）は，Hazan & Shaverの考えに基づき，「自己モデル」と「他者モデル」の2軸から成る4類型（安定型〈自己モデル-ポジティブ，他者モデル-ポジティブ〉，拒絶型〈ポジティブ，ネガティブ〉，とらわれ型〈ネガティブ，ポジティブ〉，怖れ型〈ネガティブ，ネガティブ〉）を呈示した。わが国においても，たとえば，金政・大坊（2003）が愛着スタイルと恋愛イメージとの関連を検討し，安定型の愛着スタイルをもつ者が恋愛に対して肯定的イメージを抱き，回避型の者がその反対のイメージを示すことなどを見出した。

Hazan & Shaver（1987）に始まる研究は，愛着スタイルとして対人関係管理様式が恋愛の営みに与える影響に焦点をあてている。もともとBowlbyの愛着理論は，成長過程での母子関係の潜在的影響力に注目している。この考えに従うと，青年期に形成された恋愛観は，成長過程での母親との関係の様態に支えられていると推論できる。しかしながら，恋愛が通常は異性との間で営まれることを考えると，父親との関係の影響も想定される。さらに，親との過去の関係経験だけでなく，現在の様態も，恋愛に関する意識や

How do Adolescents Manage Their Own Interpersonal Relations ? (6): Effects of Relationship Experiences with Parents on Love Attitudes.

態度に関連するだろう。このような考えに基づき，本研究の第2の目的として，父親/母親との関係経験が恋愛観におよぼす影響を以下に示す仮説を中心に検討する。

愛着理論の観点に立つと，親との過去の関係経験は特定の仕方で沈殿し，青年期初期に始まる「異性への関心」に対する碇泊点として機能すると考えられる。そのため，青年の恋愛観は，青年期以降の親子関係の様態にはあまり影響されず，むしろ親との過去の関係経験によって規定されると思われる。本研究では，以下の仮説を設定した。

仮説Ⅰ：親との現在の関係経験よりも，過去の関係経験のほうが，恋愛観に強い影響をおよぼす。

恋愛が通常は異性との間の営みであることを前提とすると，本人の性別によって父親/母親との関係経験の効果が弁別的に生じるはずである。つまり，男子青年では母親，女子青年では父親とそれぞれどのような関係経験を蓄積しているかが，恋愛相手（=異性）との関係性についての意識や態度に強く影響をもつと推測できる。ここでは，精神分析の創始者であるFreud（1917）の「エディプス・コンプレックス」の概念に従って仮説を構築した。この概念は，幼少期の子どもが同性の親に敵意や嫉妬を感じ，異性の親には性愛的な愛着を向けるという無意識的な感情複合体を意味する。この考えを拡大すると，恋愛に関する意識や態度は，自分とは異なる性別の親との関係経験に影響を受けることになる。したがって，以下の仮説が考えられる。

仮説Ⅱ-a：男子の場合には，父親との関係経験よりも，母親との関係経験のほうが，恋愛観に強い影響をおよぼす。

仮説Ⅱ-b：女子の場合には，母親との関係経験よりも，父親との関係経験のほうが，恋愛観に強い影響をおよぼす。

以上に述べた2つの研究目的のために，大学・専門学校に通う男女学生を対象とした質問紙調査を実施した。本研究の被験者は，青年期の中期から後期への移行過程あるいは後期に位置していると見なすことができる。この時期は，親からの独立意識の確立を核としており（加藤・高木，1980など），親との関係経験の基盤が再凝固し，同時に恋愛相手との関係性意識も方向づけられると考えられる。

Ⅱ．方法

調査対象および調査の実施

3つの大学・専門学校での講義を受講している学生を対象に，「対人関係に関する意識と行動」調査の名目で質問紙を実施した。青年期の範囲を明らかに逸脱している者（25歳以上）を除き，両親が健在ですべての尺度に完全に回答した者314名（男子161名，女子153名）を分析対象とした。Table 1に質問紙の実施状況と被験者数の内訳を示す。全体の平均年齢は20.07歳（SD=1.11）であったが，男子（20.23歳，SD=1.21，18～23歳）のほうが，女子（19.90歳，SD=.96，18～23歳）に比べて年齢が若干高かった（*Mann-Whitney* の U 検定，z=2.377，p=.017）。

なお，被験者の調査時点での恋人の有無を尋ねたところ，男子で53名（32.9%），女子で68名（44.4%）が「いる」と回答し，女子のほうが有意に多かった（$\chi^2_{(1)}$=4.399，p=.036）。

質問紙の構成

質問紙は，①恋愛観尺度，②回答者の恋愛状況，③被験者の基本的属性，④愛着尺度（対父親，対母親），⑤関係認知尺度（対父親，対母親），⑥対異性愛着尺度，⑦愛着スタイル尺度から構成されている。⑥と⑦については，本稿では省略する。

1．恋愛観尺度

被験者の恋愛観を測定するために，前研究（諸井，2002）で用いた恋愛観尺度を修正した。この尺度は，松井ら（1990）によるLETS-2（Lee's Love Type Scale 2nd. version）に基づき作成されたが，先述したように6成分のうちエロスが抽出できなかった。そこで，本研究では，Hendrick & Hendrick（1986）の原尺度に戻り，全研究の項目に含まれていないものを含めることにした。最終的に，マニア11項目，アガペ11項目，プラグマ10項目，ストルゲ8項目，エロス13項目，ルダス14項目となった（Appendix

Table 1　調査の実施状況と被験者数の内訳

		男子	女子	全体
常葉学園大学教育学部	2000年 10月14日	9	25	34
静岡県中部看護専門学校	11月13日	3	20	23
静岡大学共通教育	10月12日	57	37	94
静岡大学人文学部	10月24・31日	92	71	163
		161	153	314

1)。

異性との現実のつきあいにとらわれる必要はないと教示したうえで，異性関係に対する回答者自身の考えや気持ちを答えるように指示した。67項目のそれぞれに4点尺度で評定させた（「4．かなりあてはまる」～「1．ほとんどあてはまらない」)。

2．父親/母親-愛着尺度

父親と母親それぞれとの過去の関係経験を測定するために，佐藤（1993）が作成した尺度を利用した。佐藤は，「小学生だった頃」を想起させ，20項目で親との愛着の程度を測定した。中学生，高校生，大学生の段階にある男女が対象とされ，因子分析によって「不信・拒否」,「安心・依存」,「分離・不安」の3因子が抽出された。発達段階間の比較をすると，年齢が上がるほど，「不信・拒否」が低くなり，「安心・依存」が高くなった。

本研究では，愛着対象を区別するために，父親と母親それぞれについて評定させた（Appendix 2)。また，①「小学生だった頃」という回顧基準では低学年と高学年を想起するかによって異なる可能性がある，②本研究では「20歳前後の青年を被験者とする」という点を考慮し，「小学5・6年生の頃」を思い浮かべさせて回答するようにした。20項目それぞれに4点尺度で評定させた（「4．かなりあてはまる」～「1．ほとんどあてはまらない」)。

3．父親/母親-関係認知尺度

小野寺（1993）が開発した尺度に基づき，父親と母親それぞれとの現在の関係経験を測定した。小野寺は，「養育態度」の観点から，子どもの側からの親子関係の認知を扱った。日米の大学生が対象にされ，主成分分析によって父親，母親ともに「情緒的結びつき」と「統制」の2主成分が抽出された。小野寺の尺度では過去の関係と現在の関係が混在しているが，本研究では，20歳くらいの青年と親との現在の関係を表すように修正し，15項目尺度を作成した(Appendix 3参照)。なお，本研究では，意味合いを明確にするために「情緒的結びつき」を「情動的絆」とした。

父親（あるいは母親）が「この6ヵ月間，家庭の中でどのように接しているか」を想起させ，各15項目について4点尺度で評定させた（「4．かなりあてはまる」～「1．ほとんどあてはまらない」)。

以上の尺度の回答順は，「恋愛観尺度→父親-愛着尺度→父親-関係認知尺度→母親-愛着尺度→母親-関係認知尺度」である。項目の配列順効果を相殺するために，恋愛観尺度では3タイプ，愛着尺度と関係認知尺度では2タイプの配列順の異なる質問紙を使用した。なお，父親/母親-愛着尺度や父親/母親-関係認知尺度では，該当する親がいない場合には回答する必要がないことを指示した。

Ⅲ．結果

各尺度の検討

各尺度の項目水準で平均値の男女差を見たところ，多くの項目で男女差が認められたので，男女別に以下の手順で3尺度の検討を行った。まず，項目平均値（$1.5<m<3.5$）と標準偏差値（$SD>.60$）のチェックを行い，不適切な項目を除去した。恋愛観尺度と父親/母親-関係認知尺度では，因子分析によってそれぞれで仮定された構造が現れるかが検討された。父親/母親-愛着尺度ではいくつかの解を求め，負荷量｜.400｜を基準に因子の解釈可能性を検討し，妥当な因子解を決定した。

恋愛観尺度ではHendrick & Hendrick（1986）や松井ら（1990）に従って6因子解，父親/母親-関係認知尺度では小野寺（1993）に従って2因子解がそれぞれ求められた。その上で，明確な負荷量パターンが得られるまで（①特定因子に負荷量が十分に大きく〈｜.400｜以上〉，②他因子への負荷が小さい〈｜.400｜未満〉)，分析を繰り返した。最終的な因子分析の結果で各因子に｜.400｜以上の負荷を見せた項目を下位尺度項目とし（抽出因子の概念に一致するほど高得点になるようにした)，下位尺度ごとに信頼性の検討を行った。父親/母親-愛着尺度についても妥当な因子解を決定した後に以上の分析を行い，下位尺度を構成した。

1．恋愛観尺度

項目水準チェックによって，男子では8項目（15，28，44，53，59，67≦1.5; 19，48≧3.5)，女子では3項目（67≦1.5; 19，55≧3.5）が不適と判断された。残りの項目を対象として因子分析（主因子法，6因子解，プロマックス回転〈$k=3$〉）が行われた。前研究（諸井，2002）と同様に，男女ともにエロス項目（Appendix 1）がまとまりに欠けていた。そこで，エロス項目を除き5因子解を求めた。因子負荷が曖昧な項目を除去して再度分析を繰り返すと，Table 2-aに示すように，明確な負荷量パターンが得られた。

2．父親/母親-愛着尺度

項目水準チェックの結果，父親-愛着尺度では，男子で2項目（15，18≦1.5)，女子で4項目（12，13，15，18≦1.5）が不適切であった。また，母親-愛着尺度の場合には，男子の3項目（13，15，18≦1.5)，女子2項目（13，18≦1.5）が不適切となった。残りの項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転〈$k=3$〉）によって解釈可能な解を

Table 2-a　恋愛観尺度に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転〈*k*=3〉）の結果
—プロマックス回転後の因子負荷量—

	—男子（*N*=161）—					—女子（*N*=153）—				
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
〔マニア（Mania）〕										
lv13	.105	**.579**	−.078	−.080	−.057	.092	−.322	−.033	**.543**	.033
lv21	−.107	**.733**	−.066	.051	−.133	−.179	.107	.045	**.758**	.022
lv23	.050	**.642**	−.032	−.077	.000	.080	−.028	.192	**.647**	.036
lv40	.051	**.595**	.191	−.057	.000	−.014	.019	.114	**.505**	.095
lv47	−.083	**.519**	−.022	.054	.003	.008	.040	.006	**.572**	−.039
lv54	.383	**.415**	.051	−.002	.051	−.023	.125	−.236	**.501**	.082
lv57	−.026	**.712**	.106	−.112	.013	.008	−.022	.048	**.708**	−.012
lv66	.069	**.630**	−.109	.075	−.041	.032	−.194	−.002	**.552**	−.056
〔アガペ（Agape）〕										
lv 4	**.850**	−.110	.011	−.038	.063	.000	−.063	**.637**	.071	−.046
lv16	**.719**	−.023	−.011	.008	−.110	.101	−.045	**.709**	−.091	.011
lv18	**.538**	.182	−.014	.073	−.049	.020	−.036	**.634**	.016	−.030
lv20	**.515**	.093	−.051	−.138	.149	−.387	−.037	**.439**	.022	.110
lv42	**.503**	.273	.008	.059	.004	.083	.048	**.466**	.076	.021
lv50	**.551**	.279	−.026	.153	.199	.054	.063	**.796**	.105	−.059
lv62	**.841**	−.185	−.066	−.088	.027	−.149	.085	**.722**	.014	.015
lv64	**.675**	−.061	.130	−.112	−.059					
〔プラグマ（Pragma）〕										
lv 2	.099	−.077	.064	−.060	**.691**	**.786**	.012	.045	−.037	−.080
lv33	−.061	.036	−.079	−.083	**.705**	**.746**	.074	−.024	.011	−.030
lv39	.172	.118	.066	.084	**.513**	**.579**	−.036	.221	−.124	−.014
lv49	−.020	.040	.001	.043	**.627**	**.441**	.064	−.054	−.171	.232
						.558	.296	−.059	.198	−.115
						.447	−.112	.191	−.040	−.271
						.726	.053	−.112	.020	−.105
						.731	−.087	−.083	.068	−.152
						.810	−.056	.017	.039	−.109
〔ストルゲ（Storge）〕										
lv 5	−.086	−.087	**.769**	−.056	.126	−.001	.063	−.056	−.022	**.683**
lv 8	−.040	−.042	**.737**	−.083	.027	.014	.097	.091	−.001	**.737**
lv31	.120	−.014	**.418**	.200	−.121	−.045	.019	−.039	.030	**.891**
lv45	.043	−.012	**.860**	.007	−.073	.092	−.197	−.061	.181	**.522**
lv52	.080	.114	**.681**	.058	.069					
〔ルダス（Ludus）〕										
lv10	−.022	−.270	−.017	**.500**	.098	−.048	**.521**	.035	−.065	−.016
lv27	−.197	−.041	.039	**.444**	.276	.088	**.413**	−.256	.080	−.021
lv38	.038	−.133	−.049	**.521**	.094	.051	**.657**	−.002	.067	.055
lv41	−.068	−.224	.000	**.426**	.149	.173	**.538**	.176	−.173	−.004
lv58	−.147	.080	.030	**.653**	−.003	−.079	**.652**	−.171	.044	.006
lv61	.184	.052	.110	**.636**	−.263	−.132	**.502**	−.097	.030	−.141
lv63	−.109	.154	−.030	**.501**	−.143	−.068	**.708**	.091	−.006	−.109
						−.001	**.521**	−.172	−.100	.054
						.035	**.702**	.074	−.047	.094
						.196	**.550**	.049	−.072	−.099
						.059	**.452**	−.021	.311	−.061
〔因子間相関〕						〔因子間相関〕				
Ⅰ	1.000	.434	.173	−.340	−.088	1.000	.247	−.157	−.172	.145
Ⅱ		1.000	.073	−.165	−.233		1.000	−.377	−.253	.066
Ⅲ			1.000	−.058	.141			1.000	.094	.124
Ⅳ				1.000	.094				1.000	−.016

項目番号は，Appendix 1 に対応
男子：初期因子固有値≧1.957；初期説明率53.73%
女子：初期因子固有値≧2.321；初期説明率51.52%

探索し，分析を反復し明確な負荷量パターンを得た。これらの結果を Table 3-a に示す。

父親-愛着尺度では，男女ともに「不信」と「理解」をそれぞれ表す2因子が抽出された。「不信」は佐藤（1993）の「不信・拒否」，「理解」は「安心・依存」にほぼ対応する。佐藤が認めた「分離不安」の側面は得られなかった。

母親-愛着尺度については，男女ともに「理解」（女子では「理解欠如」），「親和性」，「不信」の3側面が抽出された。「親和性」は佐藤の「分離不安」項目とやや重複するが，「一緒にいたい」という意味のほうが顕著と解釈した。

Table 3-a　父親/母親-愛着尺度に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転〈k=3〉）の結果
—プロマックス回転後の因子負荷量—

〔対父親〕

—男子（N=161）—	Ⅰ	Ⅱ	—女子（N=153）—	Ⅰ	Ⅱ
〔不信〕			〔理解〕		
FAAT 5	**.701**	.104	FAAT 1	**.720**	−.112
FAAT10	**.798**	.309	FAAT 2	**.559**	.027
FAAT11	**−.559**	.328	FAAT 4	**.482**	−.346
FAAT13	**.527**	−.082	FAAT 6	**−.400**	−.016
FAAT19	**−.419**	.295	FAAT 7	**.537**	−.082
FAAT20	**.745**	.047	FAAT 9	**−.943**	−.176
〔理解〕			FAAT14	**−.414**	.265
FAAT 1	−.074	**.604**	FAAT17	**.839**	.055
FAAT 2	.198	**.419**	〔不信〕		
FAAT 4	−.275	**.523**	FAAT 3	.091	**.455**
FAAT 7	.104	**.564**	FAAT 5	−.059	**.625**
FAAT 8	−.336	**.456**	FAAT10	.124	**.749**
FAAT 9	.117	**−.630**	FAAT11	.365	**−.603**
FAAT12	.101	**.498**	FAAT16	−.214	**.544**
FAAT17	−.042	**.760**	FAAT19	.310	**−.577**
			FAAT20	.077	**.843**
〔因子間相関〕	−.536			−.604	

〔対母親〕

—男子（N=161）—	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	—女子（N=153）—	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
〔理解〕				〔不信〕			
MOAT 1	**.703**	−.054	.101	MOAT3	**.576**	.074	.077
MOAT 4	**.523**	.354	.088	MOAT4	**−.415**	−.329	.190
MOAT 6	**−.542**	.258	.122	MOAT5	**.611**	−.024	.013
MOAT 8	**.444**	.210	−.001	MOAT8	**−.560**	−.280	.003
MOAT 9	**−.666**	.016	.026	MOAT10	**.846**	−.133	.132
MOAT11	**.523**	.184	−.156	MOAT16	**.572**	.246	.069
MOAT14	**−.589**	.070	.229	MOAT19	**−.574**	−.121	.362
MOAT17	**.697**	.254	.182	MOAT20	**.861**	−.141	−.046
〔親和性〕				〔理解欠如〕			
MOAT 2	.065	**.566**	.003	MOAT6	−.036	**.780**	.232
MOAT 7	−.075	**.901**	.008	MOAT9	−.016	**.774**	−.164
MOAT12	−.118	**.735**	−.133	MOAT14	.324	**.460**	.016
MOAT19	.336	**.465**	−.046	MOAT17	−.018	**−.776**	.013
〔不信〕				〔親和性〕			
MOAT 3	.157	−.132	**.531**	MOAT2	.266	−.234	**.554**
MOAT 5	−.201	.090	**.625**	MOAT7	.012	.124	**.861**
MOAT10	−.023	−.003	**.549**	MOAT12	.003	.021	**.765**
MOAT20	−.038	−.092	**.699**	MOAT15	−.129	.098	**.528**
Ⅰ	1.000	.384	−.297	Ⅰ	1.000	.349	−.300
Ⅱ		1.000	−.044	Ⅱ		1.000	−.254

項目番号は，Appendix 2 に対応

対父親
男子：初期因子固有値≧1.785；初期説明率49.94%
女子：初期因子固有値≧1.597；初期説明率54.99%

対母親
男子：初期因子固有値≧1.668；初期説明率55.13%
女子：初期因子固有値≧2.013；初期説明率60.61%

3．父親/母親-関係認知尺度

項目水準を検討したところ，父親-関係認知では，男子で2項目（4，12≦1.5），女子で1項目（12≦1.5），母親-愛着尺度の場合には，男子の3項目（2，12≦1.5; 6≧3.5），女子2項目（3，6≧3.5）が，それぞれ不適切であった。残りの項目について因子分析（主因子法，2因子解，プロマックス回転〈k=3〉）を行い，小野寺（1993）とほぼ同様な因子が抽出されたことを確認し，反復分析により明確な負荷量パターンを得た。これらの結果を Table 3-b に示す。

4．各下位尺度の検討

以上の因子分析に基づき，各下位尺度の検討が行われた。その際，当該の下位尺度の概念に一致するほど高得点になるように項目得点を調整し，下位尺度構成項目の平均値を下位尺度得点とした。Table 2-b と Table 3-c に示すように，良好な結果が得られた。

恋愛観の規定因

被験者が形成している恋愛観の基底に親との過去の関係経験（愛着）や現在の経験（関係認知）があるかを探るために，一連の重回帰分析を行った。なお，重回帰分析で説明変数とする愛着下位尺度得点と関係認知下位尺度得点について主成分分析（プロマックス回転〈k=3〉）を実施した。主成分固有値≧1.000を基準としたところ，男女ともに3主成分が認められた（Appendix 4）。関係経験の対象による2主成分とともに，興味深いことに，父親および母親による「統制」から成る主成分が得られた。

1．仮説Ⅰの検討

父親あるいは母親との現在の関係経験（関係認知）と過去の関係経験（愛着）が恋愛観に与える影響を明らかにするために，次のような重回帰分析（一括投入法）を行った。①説明変数〈愛着下位尺度得点〉→目的変数〈恋愛観各下位尺度得点〉，②説明変数〈関係認知下位尺度得点〉→目的変数〈恋愛観各下位尺度得点〉。①と②の分析後に，残りの説明変数群を追加することによって R^2 値の変化量を算出し，恋愛観の各側面に対する愛着と関係認知それぞれの独自の説明力を調べた。これらの結果を Table 4 に示す。

(1)男子

父親との関係経験については，アガペのみで有意な関係が見出された。仮説Ⅰに反して，関係認知がアガペに有意な影響を与えており，愛着よりも強い相対的影響があった。

母親との関係経験では，アガペで有意な影響，ルダスで

Table 3-b　父親/母親-関係認知に関する因子分析（主因子法，プロマックス回転〈*k*=3〉）の結果
ープロマックス回転後の因子負荷量ー

	〔対父親〕				〔対母親〕			
	—男子（*N*=161）—		—女子（*N*=153）—		—男子（*N*=161）—		—女子（*N*=153）—	
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ
〔情動的絆〕								
1	**.728**	−.154	−.011	**.892**	**.780**	−.054	−.106	**.909**
3	**.446**	.171	***	***	***	***	***	***
5	**.760**	.021	.031	**.795**	**.777**	.009	.029	**.764**
6	***	***	***	***	***	***	***	***
7	**.463**	.052	***	***	**.457**	.097	174	**.463**
8	**.411**	.178	***	***	***	***	***	***
9	**.734**	−.145	.009	**.791**	**.776**	−.104	−.053	**.858**
11	**.457**	.118	***	***	**.467**	.227	.135	**.433**
14	***	***	***	***	***	***	***	***
〔統制〕								
2	−.145	**.557**	**.643**	−.224	***	***	**.775**	−.082
4	***	***	**.610**	.140	.009	**.428**	**.409**	.067
10	.123	**.603**	**.722**	.121	.014	**.558**	**.795**	.120
12	***	***	***	***	***	***	**.472**	−.023
13	.057	**.663**	**.626**	.039	.023	**.654**	**.691**	.016
15	.091	**.694**	**.706**	−.098	.018	**.684**	**.698**	.053
〔因子間相関〕		.058		−.041		.120		−.001

項目番号は，Appendix 3 に対応
対父親
　男子：初期因子固有値≧2.221；初期説明率48.75%
　女子：初期因子固有値≧2.447；初期説明率65.04%
対母親
　男子：初期因子固有値≧1.964；初期説明率53.56%
　女子：初期因子固有値≧2.867；初期説明率55.40%

Table 2-b 恋愛観下位尺度の検討

—男子（*N*=161）—					
〔マニア〕	α =.839,	r =.427－.653,	m =2.85,	SD =.57	Z= .974 p=.299
〔アガペ〕	α =.868,	r =.550－.719,	m =2.68,	SD =.57	Z= .879 p=.422
〔プラグマ〕	α =.728,	r =.461－.583,	m =2.00,	SD =.64	Z=1.271 p=.079
〔ストルゲ〕	α =.815,	r =.377－.726,	m =2.36,	SD =.65	Z=1.022 p=.247
〔ルダス〕	α =.746,	r =.360－.600,	m =2.44,	SD =.51	Z= .943 p=.336
尺度中性点（2.5）との比較：マニア，アガペ>2.5；プラグマ，ストルゲ＊<2.5（＊はp<.01，他はp<.001）					
—女子（*N*=153）—					
〔マニア〕	α =.818,	r =.358－.653,	m =2.82,	SD =.53	Z= .989 p=.282
〔アガペ〕	α =.825,	r =.377－.678,	m =2.16,	SD =.52	Z=1.101 p=.177
〔プラグマ〕	α =.868,	r =.400－.721,	m =2.10,	SD =.63	Z=1.072 p=.200
〔ストルゲ〕	α =.799,	r =.478－.741,	m =2.45,	SD =.67	Z=1.190 p=.118
〔ルダス〕	α =.847,	r =.344－.630,	m =2.47,	SD =.53	Z= .802 p=.540
尺度中性点（2.5）との比較：マニア>2.5；アガペ，プラグマ<2.5（すべてp<.001）					

α 値：最終構成項目での α 係数; m 値： 構成項目の合計得点を項目数で割った値
SD 値：標準偏差；Z 値：正規性の検定（*Kolmogorov-Smirnov*の適合度検定）

傾向性が認められた。アガペは，仮説Ⅰと一致して，母親との愛着経験によって有意に規定され，関係認知よりも強く影響されていた。また，ルダスでは，傾向性にとどまるが仮説Ⅰを支持する結果が得られた。

(2)女子

父親に関する結果を見ると，マニア，アガペ，プラグマで有意な関連があった。マニアとアガペでは，愛着経験が有意に影響し，関係認知よりも相対的影響があることを示す傾向性が認められた。これらは，仮説Ⅰを支持する。また，プラグマでは，仮説Ⅰに反して，関係認知が有意であり，愛着経験よりも説明力を示した。

母親との関係経験の場合には，アガペを除いて有意な関係や傾向性が見出された。マニア，プラグマ，およびストルゲでは，仮説Ⅰと一致して愛着経験の有意な影響が現れた。しかし，プラグマ，ストルゲ，ルダスでは，仮説Ⅰに反して，関係認知の影響が有意であったり，その傾向性が

Table 3-c　愛着尺度および関係認知尺度の下位尺度に関する検討

—男子（*N*=161）—					
〈関係認知〉					
〔対父親-情動的絆〕	α =.774,	r=.406－.635,	m=2.14,	SD=.64	Z=1.146 p=.145
〔対父親-統制〕	α =.732,	r=.456－.571,	m=2.28,	SD=.70	Z=1.109 p=.171
〔対母親-情動的絆〕	α =.782,	r=.432－.672,	m=1.90,	SD=.66	Z=1.345 p=.054
〔対母親-統制〕	α =.675,	r=.374－.509,	m=2.16,	SD=.67	Z=1.322 p=.061
〈愛着〉					
〔対父親-不信〕	α =.805,	r=.498－.662,	m=2.22,	SD=.67	Z=1.175 p=.127
〔対父親-理解〕	α =.808,	r=.284－.700,	m=2.15,	SD=.57	Z= .772 p=.590
〔対母親-理解〕	α =.830,	r=.398－.657,	m=2.79,	SD=.56	Z=1.228 p=.098
〔対母親-親和性〕	α =.771,	r=.462－.705,	m=2.20,	SD=.61	Z=1.422 p=.035
〔対母親-不信〕	α =.701,	r=.374－.593,	m=2.20,	SD=.67	Z=1.337 p=.056
尺度中性点（2.5）との比較；対母親-理解>2.5					
対父親-情動的絆，対父親-統制，対母親-情動的絆，対母親-統制，対父親-不信，対父親-理解，対母親-親和性，対母親-不信<2.5（すべてp<.001）					
—女子（*N*=153）—					
〈関係認知〉					
〔対父親-情動的絆〕	α =.865,	r=.718－.793,	m=2.11,	SD=.95	Z=2.001 p=.001
〔対父親-統制〕	α =.791,	r=.522－.622,	m=2.13,	SD=.77	Z=1.235 p=.095
〔対母親-情動的絆〕	α =.803,	r=.444－.730,	m=2.73,	SD=.75	Z=1.003 p=.267
〔対母親-統制〕	α =.803,	r=.379－.710,	m=2.15,	SD=.70	Z=1.323 p=.060
〈愛着〉					
〔対父親-理解〕	α =.853,	r=.357－.765,	m=2.32,	SD=.67	Z=1.022 p=.247
〔対父親-不信〕	α =.859,	r=.355－.758,	m=2.26,	SD=.71	Z=1.040 p=.230
〔対母親-不信〕	α =.867,	r=.528－.739,	m=2.06,	SD=.66	Z=1.191 p=.117
〔対母親-理解欠如〕	α =.808,	r=.518－.700,	m=1.88,	SD=.67	Z=1.397 p=.040
〔対母親-親和性〕	α =.752,	r=.418－.681,	m=2.12,	SD=.66	Z=1.277 p=.077
尺度中性点（2.5）との比較；対母親—情動的絆>2.5					
対父親-情動的絆，対父親-統制，対母親-統制，対父親-理解，対父親-不信，対母親-不信＊，対母親-理解欠如，対母親-親和性<2.5（＊はp<.05，他はp<.001）					

α値：最終構成項目でのα係数；m値：構成項目の合計得点を項目数で割った値
SD値：標準偏差；Z値：正規性の検定（*Kolmogorov-Smirnov* の適合度検定）

見られた。2変数群の相対的影響力を調べると，プラグマで愛着経験の強い影響力が認められ，マニアやストルゲでも同様の傾向性があり，仮説Ⅰが支持された。しかし，ルダスでは，関係認知の有意な相対的影響があった。

2．仮説Ⅱ-a，bの検討

母親と父親それぞれとの関係経験の相対的影響を検討するために，一連の重回帰分析を試みた。男女それぞれで，各恋愛観得点を目的変数として，「父親」変数群投入後に「母親」変数群を追加したときのR^2値の変化量を算出した。次に，説明変数群の投入を逆にしてR^2値の変化量を求めた。これらの結果をTable 4に示す。

男子では，アガペで「父親」変数群の独自な影響の傾向性が認められた。女子では，プラグマとルダスで「母親」変数群の有意な相対的影響が見出された。しかしながら，これらの結果は，仮説Ⅱ-a,bに反している。

次に，仮説Ⅰに関する分析で有意な影響あるいは傾向性が認められた変数を取り出し，それらの変数を説明変数とし，当該の恋愛観得点を目的変数とする重回帰分析（ステップワイズ法: 投入基準p <.05，除去基準p >.10）を行った。これらの結果をFig. 1に表す。

男子を見ると，アガペのみで有意な関連が得られた。父親の「情動的絆」と母親の「理解」が有意な規定因であり，前者は仮説Ⅱ-aと不一致であり，後者は一致した。女子では，ルダスを除くすべての恋愛観で有意な影響が認められた。仮説Ⅱ-bを支持したのは「アガペ」のみで，他はすべて仮説Ⅱ-bと不一致であった。

Ⅳ．考察

本研究の第1の目的は，Lee（1977）が仮定した6つの恋愛スタイルの再検討であった。前研究（諸井，2002）ではエロス成分を男女ともに抽出できなかった。そこで，本研究では，LETS-2（Lee's Love Type Scale 2nd. version; 松井ら，1990）に加え，原尺度（Hendrick & Hendrick, 1986）に戻り尺度項目を拡大を図った（Appendix 1）。しかしながら，本研究でも男女ともにエロス成分を得ることができな

Table 4　親との関係経験（愛着，関係認知）が恋愛観におよぼす影響―重回帰分析―：標準化偏回帰係数

	マニア	アガペ	プラグマ	ストルゲ	ルダス
―男子（*N*=161）―					
〔愛着〕					
対父親-不信	β= .035	β=−.028	β= .030	β= .013	β= .147
対父親-理解	β=−.038	β= .076	β= .059	β= .100	β=−.021
	R^2= .004	R^2= .009	R^2= .003	R^2= .009	R^2= .025
「関係認知」変数追加(a)	ΔR^2= .001	ΔR^2= .061 p=.007	ΔR^2= .027	ΔR^2= .010	ΔR^2= .020
〔関係認知〕					
対父親-情動的絆	β=−.017	β= **.235** p=003	β= .000	β= .130	β=−.153
対父親-統制	β= .039	β= .070	β=−.116	β=−.019	β=−.006
	R^2= .002	R^2= .064 p=.005	R^2= .014	R^2= .017	R^2= .024
「愛着」変数追加(b)	ΔR^2= .004	ΔR^2= .006	ΔR^2= .016	ΔR^2= .002	ΔR^2= .021
〔愛着〕					
対母親-理解	β= .024	β= **.284** p=.002	β= .054	β= .061	β=**−.231** p=.011
対母親-親和性	β= .107	β=−.060	β= .040	β= .075	β= .170 p=.065
対母親-不信	β= .084	β= .026	β=−.015	β=−.016	β= .085
	R^2= .019	R^2= .069 p=.011	R^2= .007	R^2= .014	R^2= .046 p=.060
「関係認知」変数追加(a)	ΔR^2= .003	ΔR^2= .002	ΔR^2= .006	ΔR^2= .007	ΔR^2= .004
〔関係認知〕					
対母親-情動的絆	β=−.005	β= .093	β= .102	β= .023	β= .025
対母親-統制	β= .037	β= .063	β=−.036	β= .064	β=−.044
	R^2= .001	R^2= .014	R^2= .011	R^2= .005	R^2= .002
「愛着」変数追加(b)	ΔR^2= .020	ΔR^2= .057 p=.002	ΔR^2= .002	ΔR^2= .016	ΔR^2= .048 p=.053
「母親」変数群追加(c)	ΔR^2= .026	ΔR^2= .016	ΔR^2= .016	ΔR^2= .019	ΔR^2= .019
「父親」変数群追加(d)	ΔR^2= .009	ΔR^2= .053 p=.053	ΔR^2= .034	ΔR^2= .016	ΔR^2= .041
―女子（*N*=153）―					
〔愛着〕					
対父親-理解	β= .156 p=.055	β= .200 p=.014	β= .116	β= .118	β= .041
対父親-不信	β= .150 p=.064	β= .036	β=−.014	β= .045	β= .072
	R^2= .042 p=.040	R^2= .040 p=.047	R^2= .014	R^2= .015	R^2= .006
「関係認知」変数追加(a)	ΔR^2= .013	ΔR^2= .013	ΔR^2= .041 p=.043	ΔR^2= .022	ΔR^2= .015
〔関係認知〕					
対父親-情動的絆	β= .084	β=−.055	β= .201 p=.013	β= .148	β= .029
対父親-統制	β= .007	β= .119	β=−.047	β=−.006	β=−.072
	R^2= .007	R^2= .017	R^2= .043 p=.037	R^2= .022	R^2= .006
「愛着」変数追加(b)	ΔR^2= .023 p=.061	ΔR^2= .036 p=.066	ΔR^2= .012	ΔR^2= .015	ΔR^2= .015
〔愛着〕					
対母親-不信	β= .142 p=.081	β= .075	β= **.223** p=.003	β= **.179** p=.025	β= .021
対母親-理解欠如	β=−.042	β= .005	β= **.161** p=.035	β= .153 p=.058	β=−.124
対母親-親和性	β= **.164** p=.046	β= .117	β= **.280** p=.001	β= .133 p=.099	β= .090
	R^2= .052 p=.048	R^2= .021	R^2= .176 p=.001	R^2= .081 p=.006	R^2= .020
「関係認知」変数追加((a)	ΔR^2= .001	ΔR^2= .012	ΔR^2= .002	ΔR^2= .017	ΔR^2= .050 p=.021
〔関係認知〕					
対母親-情動的絆	β= .018	β=−.004	β= .150 p=.060	β= **.215** p=008	β=−.113
対母親-統制	β= .078	β= .149	β= **.180** p=.025	β= .036	β=−.131
	R^2= .007	R^2= .022	R^2= .060 p=.010	R^2= .049 p=.024	R^2= .032 p=.085
「愛着」変数追加(b)	ΔR^2= .046 p=.073	ΔR^2= .010	ΔR^2= .118 p=.001	ΔR^2= .049 p=.051	ΔR^2= .038
「母親」変数群追加(c)	ΔR^2= .041	ΔR^2= .020	ΔR^2= .147 p=.001	ΔR^2= .053	ΔR^2= .092 p=.014
「父親」変数群追加(d)	ΔR^2= .016	ΔR^2= .034	ΔR^2= .025	ΔR^2= .022	ΔR^2= .015

(a)「愛着」変数群投入後に「関係認知」変数群を追加したときのR^2値の増加量
(b)「関係認知」変数群投入後に「愛着」変数群を追加したときのR^2値の増加量
(c)「父親」変数群投入後に「母親」変数群を追加したときのR^2値の増加量
(d)「母親」変数群投入後に「父親」変数群を追加したときのR^2値の増加量

かった。このことから，Leeが仮定したエロスの側面は，恋愛に対する一般的態度としては存在しないと明確に解釈できる。前研究でも指摘したように，このエロス概念は，特定の恋愛対象が現れたときに心理学的概念として収斂するかもしれない。このことを今後の研究で検討する必要がある。

成長過程での母子関係の潜在的影響力に関して定式化したBowlby（1969）の考えを拡大し，父親や母親との過去の関係経験や現在の様態が異性と営む恋愛に関する意識や態度に関連すると考え，父親/母親との関係経験が恋愛観におよぼす影響に関する仮説を導き出した。これらの仮説の検討を本研究の第2の目的とし，そのために父親/母親との関係経験を測定する2種類の尺度を作成した（佐藤，1993; 小野寺，1993）。

父親/母親との現在の関係経験を測定する関係認知尺度の分析結果は，小野寺（1993）の結果をほぼ再現して「情動的絆」と「統制」の2次元性を示した。過去（「小学5・6年生だった頃」）の関係経験を測った尺度の分析結果は，「不信・拒否」，「安心・依存」，「分離・不安」の3因子を得た佐藤（1993）とは少し異なっていた。本研究では愛着対象としての父親と母親を独立して測定したが，男女ともに父親では2因子，母親では3因子が見出された。母親に対しては「親和性」が分離して抽出されたのである。尺度中性点との比較結果を見ると（Table 3-b参照），先行研究（小野寺，1993）や全国調査（内閣府政策統括官編，2001）と一致して，父親よりも母親に対して肯定的な関係経験を営んでいた。しかし，これは，仮説Ⅱ-a，bの基礎にある被験者の性別と親の性別との弁別的関係の前提に反することになる。

次に，父親/母親との関係経験が恋愛観におよぼす影響に関する仮説の検討結果について考察する。親との過去の関係経験の相対的影響に関する仮説Ⅰは，男子では母親のアガペとルダス，女子では父親のマニアとアガペ，母親のマニア，プラグマや，ストルゲで，それぞれ支持された。しかし，仮説Ⅰに反する結果も現れた。男子では父親のアガペ，女子では，父親のプラグマ，母親のルダスで，それぞれ現在の関係経験のほうが影響力を示した。一般的には，男女ともに母親との愛着経験が恋愛観に強い相対的影響を見せた。父親の場合には，とくに女子で過去の関係経験が恋愛観に影響をもつといえる。Hazan & Shaver（1987）が提唱する愛着スタイルは本研究でいうところの現在の関係経験にあたる。父親/母親との間で営まれた過去の関係経験が青年になって保持される恋愛観に強い影響を示した本研究の結果は，Hazan & Shaverの愛着スタイルと恋愛の営みとの関係よりも，過去の親子関係経験の蓄積が恋愛行動におよぼす影響の可能性を示唆している。

「母親との関係経験→息子の恋愛観形成」，「父親との関係経験→娘の恋愛関係形成」という弁別的影響に関する仮説Ⅱ-a，bの検討結果は，仮説とは逆の傾向を示した。つまり，男子のアガペで「父親との関係経験→息子の恋愛観形成」，女子のプラグマやルダスで「母親との関係経験→娘の恋愛観形成」を意味する相対的影響があった。また有力変数を採り出した分析でも（Fig. 1），男子と女子のアガペで仮説Ⅱ-a，bと一致した傾向が認められただけで，有意な影響の大半は仮説と逆の傾向であった。

本研究で設定した仮説Ⅱでは，通常は恋愛相手が異性であることに基づき本人と逆の性別の親からの相対的影響の可能性を予想した。しかしながら，本研究の結果を見る限りでは，とりわけ女子の恋愛観は母親との関係経験に密接に関係していた。この背景には，女子の成長過程における母親に対する同一化があると考えられる。たとえば，性役割同一性の確立の基本条件として同性の親に対する同一視が挙げられている（柏木，1973）。また，わが国の家族構造の観点からも母親との相互作用の重要性が指摘されている。

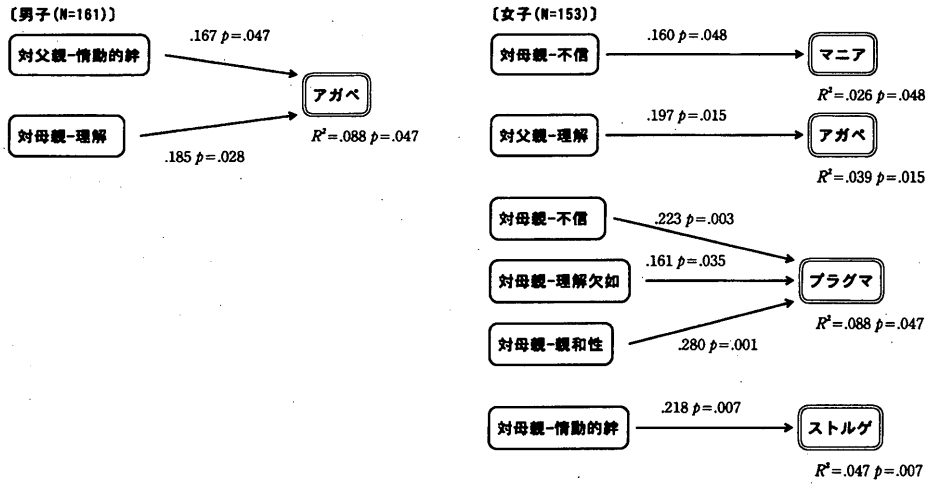

Fig.1　恋愛観におよぼす関係経験の影響—重回帰分析（変数増減法）の結果—

長田（1987）は，わが国の家族関係の特徴として「夫婦疎遠」と「母子密着」を挙げた。つまり，父親よりも母親との関係経験のほうが一般的に濃密になりがちであり，母親というフィルターを通した「異性意識＝恋愛観」が形成されている可能性がある。したがって，男子は，「父親との関係の希薄さ」と「母親に対する同一性困難」という条件化で，「同年齢の男女との洗練された交際の学習」(Havighurst, 1953）という青年期の重要な発達課題に取り組まなければならないことになる。

ところで，岡本・上地（1999）は，いわゆる「第2の個体化」の過程を明らかにするために，中学1年生から高校3年生を対象として親子関係と友人関係についてのイメージを測定した。親を同一化の対象として理想化する傾向について興味深い結果が得られた。父親関係では性差や学年差が現れないのに，母親関係では，女子のほうが母親に同一化する傾向があり，中学3年期にはいったん減少し高校生期に再理想化が起きていた。一方で，異性友人に対する親密感の単調な高まりが男女ともに認められた。この岡本・上地の結果は，本研究で得られた恋愛観に対する影響という点での母親の優位性が直線的ではないことを示唆する。

本研究で設定した仮説Ⅰや仮説Ⅱ-a，bは，わが国の家族構造の特徴を含め，発達的観点から修正し，再検討する必要があるといえよう。さらに，本研究では，Bowlby（1969）による枠組みに基づき父親/母親との関係経験の影響に限定した分析を行ったが，異性との実際の相互作用も恋愛観を変容させるはずである。親との関係経験が恋愛観の基礎を形成するにしても，直面する現実としての恋愛経験の蓄積は，その恋愛観をどのように維持・修正するかを孕みながら行われる。これらのことを踏まえた検討を行うべきであろう。

なお，本研究では，「過去の関係経験（愛着）→現在の関係経験（関係認知）」という時間的因果を前提とした。Davis（1979）は，ノスタルジアを「現在もしくは差し迫った状況に対するなんらかの否定的な感情を背景にして，生きられた過去を肯定的な響きでもって呼び起こすこと」と定義し，ノスタルジア理論を構築した。彼に従えば，親子関係の認知についても現在の関係経験が過去の関係経験想起に影響をおよぼす可能性が十分にある。つまり，親子関係のノスタルジア的取り扱いも今後の重要な課題といえよう。

ところで，臨床場面で近年扱われている「恋愛依存症」も本研究の課題と関連する。「恋愛依存症」とは，恋愛感情を抱く他者に対する過度の依存，束縛や関心に特徴づけられ，その他者に「無条件で確実な愛情」を期待するという共依存の1形態である（Mellody *et al.*, 1992)。この背景には親との幼少期の相互作用経験に基づく「見捨てられへの怖れ」と「親密さに対する怖れ」が想定されている。「些細な臨床的問題」を抱える健常者と「異常域」にある者との連続性を前提として（諸井，1996)，臨床的研究で構築されている恋愛に関する枠組みも今後参考にすべきであろう。

〈付記〉

(1)本研究は，三笠由佳さんと宮本恵梨子さん（静岡大学人文学部・社会学科・社会心理学コース2002年3月卒業）が筆者の下で取り組んだ卒業研究に由来する。彼らが収集したデータを筆者が再分析した。本研究で得られた成果は，卒業研究で彼らが示した熱意の賜物である。また，再分析の際に，奥本真由美さん（同志社女子大学現代社会学部社会システム学科2004年3月卒業）の助力を得た。

(2)質問紙の実施にあたって，静岡大学人文学部社会学科助教授篠原和大先生にご協力を賜った。

(3)本研究の分析は，同志社女子大学総合文化研究所平成15年度奨励金（「若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究」）に基づいて行われた。

(4)データの統計的解析にあたって，*SPSS12.0J for Windows*を利用した。

(5)E-Mail: kmoroi@mail.dwc.doshisha.ac.jp

Ⅴ．引用文献

Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.

Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss, vol.1: Attachment.* London: Hogarth. 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子訳『母子関係の理論Ⅰ―愛着行動―』1976 岩崎学術出版社

Davis, F. 1979 *Yearning for yesterday: A sociology of nostalgia.* The Free Press　間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳『ノスタルジアの社会学』1990 世界思想社

Freud, S. 1917 *Vorlesungen zur Einfuhrüng in die Psychoanalyse.* 懸田克躬訳『精神分析学入門Ⅱ』2001 中公クラシックス

Havighurst, R.J. 1953 *Human development and education.* New York: Longmans, Green & Co.,Inc. 荘司雅子監訳『人間の発達課題と教育』1995 玉川大学出版部

Hazan, C.,& Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as

an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.

Hendrick, C., & Hendrick, S. 1986 A theory and method of love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 392-402.

金政祐司・大坊郁夫　2003　青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響　社会心理学研究，19, 59-76.

加藤隆勝・高木秀明　1980　青年期における独立意識の発達と自己概念との関係　教育心理学研究，28，336-340.

柏木恵子　1973　現代青年の性役割の習得　依田新他編『現代青年心理学講座 5 現代青年の性意識』金子書房 pp.99-139.

Lee, J.A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 173-182.

松井　豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美　1990　青年の恋愛に関する測定尺度の構成　立川短大紀要，23，13-23.

Mellody, P., Miller, A.W., & Miller, J.K. 1992 *Facing love addiction*. Harper Collins Publishers, Inc. 水澤都加佐訳『恋愛依存症の心理分析―なぜ，つらい恋にのめり込むのか―』2001　大和書房

諸井克英　1996　臨床社会心理学とは何か　人文論集（静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告），47(1), 49-74.

諸井克英　2002　若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究(3)―恋愛観におよぼす対異性-有能性と対異性-不安の影響―同志社女子大学総合文化研究所紀要，19，77-92.

内閣府政策統括官（総合企画調整担当）編　2001『日本の青少年の生活と意識 第 2 回調査―青少年の生活と意識に関する基本調査報告書―』財務省印刷局

岡本清孝・上地安昭　1999　第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係　教育心理学研究，47，248-258.

小野寺敦子　1993　日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究　心理学研究，64，147-152.

長田雅喜　1987　日本の社会構造と家族関係　長田雅喜編『家族関係の社会心理学』福村出版 pp.200-212.

佐藤朗子　1993　青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），40，215-226.

Appendix 1　恋愛観尺度（設定下位尺度別）

〔マニア（Mania）〕

3　私は，いつも恋人のことを考えている。
13　恋人には，いつも私のことだけを考えていて欲しい。
21　恋人が私以外の異性と楽しそうにしていると，気になって仕方がない。
23　恋人からの愛情が，ほんのわずかでも欠けていると感じると，悩み苦しむ。
25　恋人とケンカをすると，不安や心配でやつれてしまう。
40　恋人が別の人とつきあっているかもしれないと思うと，居ても立ってもいられない。
54　恋人のことを思うと，強い感情がこみあげてどうしようもなくなる。
57　恋人が私を気にかけてくれないと，私は気がめいってしまう。
66　恋人は私だけのものであって欲しい。
37＊もし恋人が私を無視したら，恋人の気を惹こうと，私はわざと馬鹿なことをする。
47＊恋人と私の間にうまくいかないことがあるときには，私は腹が立つ。

〔アガペ（Agape）〕

4　恋人のためなら，私はどんなことでも我慢できる。
16　私自身の幸福よりも，恋人の幸福が優先しないと，私は幸福になれない。
20　恋人のためなら，私は死ぬことさえも恐れない。
30　たとえ私が愛する人から全く愛されなくても，私はその人を愛していたい。
32　恋人と一緒なら，私はどんなに貧乏な暮らしでも平気である。
42　私がどんなにつらいときでも，恋人に対して，いつでも優しくしてあげたい。
50　恋人のためなら，私は自分ができなかったことを克服しようとする。
62　恋人の望みをかなえるためなら，私自身の望みはいつでも喜んで犠牲にできる。
64　恋人が苦しむくらいなら，私自身が苦しんだ方がましである。
18＊恋人が苦しんでいるときには，私は全力で恋人を助けようとする。
29＊恋人が私のものを使っても，全く気にならない。

〔プラグマ（Pragma）〕

2　異性と深く関わる前には，私はその人が将来どんな人になるだろうかとよく考える。
15　恋人を選ぶときには，私はその人が私の経歴にどう影響するかも考える。
28　恋人を選ぶときには，私はその人が私の家族にどう受けとられるかを一番に考える。
33　恋人を選ぶ前に，私は自分の人生を慎重に計画しようとする。
35　恋人を選ぶときには，私はその人とのつきあいが，私の格（レベル）を下げないかと考える。
39　恋人を選ぶのに重要なことは，その人がよい親になるかどうかである。
44　恋人を選ぶときには，私はその人の経済力を考える。
49　恋人を選ぶときには，私はその人の将来性を考える。
53　恋人を選ぶときには，私はその人の学歴や育ち（家柄）でのつり合いを考える。
67＊私は，相手と私の間にどのような子どもができるかを想像してから，相手に夢中になるようにする。

〔ストルゲ（Storge）〕

5　長い友人関係を経て，恋人になる方がよい。
8　最良の愛は，長い友情の中から育つ。
12　私は特定の異性との友情を大切にしたい。
26　恋人との恋愛関係が終わっても，その人とは友人でいたいと思う。
31　異性との友人関係は，恋愛関係へと発展することがよくある。
45　私が最も満足できる恋愛関係は，よい友情からうまれるものである。
52　異性との友情は，時間をかけて次第に恋愛へと変わっていくものである。
60　異性との友情がいつから恋愛に変わるのか，はっきりとは言えない。

Appendix 1のつづき

〔エロス（Eros）〕

1　だれか異性を好きになると，私はすぐに感情的にのめり込んでしまう。
7　恋人と私は，お互いに本当に理解しあえるだろう。
11　異性とつきあうときには，会ってすぐにお互いに惹かれあうかどうかが大切である。
14　恋人と私は，お互いに出会うために，この世に生まれてきたと感じるだろう。
22　恋人と私は，外見的にうまくつり合っている方が望ましい。
46　恋人との愛を大切にしようと気を使う。
51　恋人といると，甘く優しい雰囲気になる。
55　恋人と私は，心の中で結びついていたい。
65　恋人と一緒にいると，私たちが本当に愛し合っていることを実感できる。
9＊恋人の外見は，私の好みにあっている方がよい。
19＊恋人同士であれば，お互いに重要な存在だと感じるはずである。
36＊恋人とのセックスでは，お互いに心地よいと感じることが，重要である。
48＊恋人とのセックスで，お互いに十分に満足できることは，大切である。

〔ルダス（Ludus）〕

6　恋人に期待をもたせたり，恋人が自分に夢中にならないように気をつける。
17　恋人が私に頼りすぎるときには，私は少し身を引きたくなる。
24　私が必要だと感じたときだけ，恋人にそばにいてほしい。
27　私は，恋人への関わり方について，少しあいまいにしておこうと気をつける。
34　私は恋人にあれこれと干渉されると，別れたくなる。
41　だれか異性と交際していても，あまり深入りせず，自由な関係でありたい。
43　恋人から頼られ過ぎたりベタベタされるのが嫌である。
56　恋人とは定期的に会うよりも，気が向いたときにだけ会いたい。
58　特定の交際相手を決めたくない。
10＊恋人同士の間で，お互いに知らないことがあった方が多少はよい。
38＊私について恋人が知らない部分がある方が，恋人のためになることもある。
59＊恋愛は，始めるのも終わらせるのも簡単である。
61＊恋人以外の異性とつきあうことも大切である。
63＊私は，多くの異性と「恋愛ゲーム」を楽しみたい。

＊：先行研究（諸井，2002）で用いなかった項目

Appendix 2 対父親-愛着尺度（佐藤〈1993〉による因子分析の結果に基づく分類）

〔不信・拒否〕
5 今の父親とは違う父親が欲しいと思うことがあった。
8 父親は私の良い面も悪い面も分かってくれていた。
10 父親は，私のちょっとしたことで，よく気分を害した。
11 父親のことが好きだった。
13 父親からあまり好かれてないように感じることがあった。
16 父親は，私の本当の気持ちを分かっていなかった。
18 父親に捨てられてしまうかもしれないと思うことがあった。
20 父親のことを，嫌いだと思うことがあった。
〔安心・依存〕
1 学校での出来事をよく父親に話した。
4 父親に励ましてもらうと元気がでた。
6 父親に悩みを話すのは，恥ずかしく感じた。
9 父親に何か相談したり，父親の意見を聞いたりすることは少なかった。
14 何か困ったことがあっても，父親に頼ることはできなかった。
17 心配事や悩みがあるとき，それを父親に話した。
〔分離不安〕
7 父親がそばについていてくれないと不安だった。
12 父親から離れて一人で行動するのは怖かった。
15 できれば，父親とだけ，いつも一緒にいたいと思った。
19 父親と一緒にいると落ち着いた。
〔残余項目〕
2 何についても父親の意見を聞き，言う通りにしていた。
3 父親によく嘘をついた。

母親版では「父親」という言葉を「母親」に置き換えた。

Appendix 3 対父親-関係認知尺度（小野寺〈1993〉による主成分分析の結果に基づく分類）

〔情動的絆〕
1 父親と，どこかに遊びに行くことがある。
3 父親は，その日の出来事について話をすることが好きである。
5 父親は，私をいろいろな所に連れていってくれる。
6 父親は，私の将来について気にかけている。
7 父親は，ふざけて私の肩を叩いたりする。
8 父親は，私がどこで何をしているかをいつも気にかけている。
9 父親と二人で外出することがある。
11 父親は，父自身の子どものころや若いころのことについて話してくれる。
14 父親は，私のボーイフレンド/ガールフレンドについて尋ねる。
〔統制〕
2 父親は，私に口答えを許さない。
4 父親は，帰宅時刻にうるさい。
10 父親は，しつけに厳しく厳格な教育方針をもっている。
12 私のことについては，父親が最後には決める。
13 父親は，叱ったり批判することが私のためになると思っている。
15 父親は，私が悪いことをしたとき，かっとして怒る。

母親版では「父親」という言葉を「母親」に置き換えた。

Appendix 4　父親/母親-愛着および関係認知に関する主成分分析（プロマックス回転〈*k*=3〉）の結果
—プロマックス回転後の主成分負荷量—

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
〔男子（*N*=161）〕			
対父親-不信	−.883	.186	.273
対父親-理解	.731	.239	.057
対父親-情動的絆	.661	.239	.348
対母親-親和性	−.079	.787	−.207
対母親-理解	.153	.769	−.209
対母親-情動的絆	.183	.584	.297
対母親-統制	.164	−.125	.759
対母親-不信	−.033	−.352	.729
対父親-統制	−.304	.340	.547
〔因子間相関〕Ⅰ	1.000	.184	−.020
Ⅱ		1.000	.139
〔女子（*N*=153）〕			
対父親-理解	.859	.049	.089
対父親-情動的絆	.763	.025	.130
対父親-不信	−.741	.093	.282
対母親-親和性	−.167	−.783	.341
対母親-不信	.050	.698	.407
対母親-理解欠如	−.275	.578	.136
対母親-情動的絆	.396	−.484	.120
対母親-統制	.235	−.026	.862
対父親-統制	−.149	−.064	.716
〔因子間相関〕Ⅰ	1.000	−.269	−.069
Ⅱ		1.000	.154

男子：初期主成分固有値≧1.374
　　初期説明率63.37%
女子：初期主成分固有値≧1.192
　　初期説明率62.96%